

国語

【新学習指導要領を踏まえた思考力・判断力・表現力の考え方】

思考力

取り扱う題材を深く理解して処理できる力、課題を見出す力である。

例えば「条件が変わった、視点が変わったなどにより、結果がどう変わっていくか、その変化でどういう事象等が生ずるか、どういう関係性が生ずるか、どういう価値が生まれるかなど、直接文章や図表などで示されていない事象について考える問題」などがこれに当たる。

判断力

取り扱う課題や関係性に対してある尺度、基準、条件を当てはめ「分類・順位付け・優先順位づけ・規則性発見、統合」等の判断・発見、論理的推論を進められる力である。

例えば「関係性を道筋だてて思考させた上で新たな基準、条件、意見、多様な価値観を踏まえて最善となるものを見出す問題」などがこれに当たる。

表現力

思考、判断により獲得した情報を正確に処理して絞り込み、抽象化、関連付けなどを行い、他者に伝達する意図を持って、文章や図表、グラフ等で可視化できる力である。

例えば「ある事象の変化、関係性、順位付けなどに対する状態を、最適な文、要旨、図表、グラフ等で表現しているものを選択させる問題」などがこれにあたる。

<国語の場合>

○思考力

- ・ 文章に記述された内容から筆者や話者の主張、視点、相互関係などを思考する力。
- ・ 文章に記述された内容から人物の心情やその状態、変化、および全体の展開などを思考する力。

○判断力

- ・ 文章における表現や論の展開などから、筆者が伝えようとする主旨を正しく判断する力。
- ・ 文章に記述された内容から必要な情報を収集して、登場人物の関係や心情変化、様々な主張の関係、全体の要点などを把握する力。
- ・ 引用された図表等と文章を関連づけて、そこにある関係性を正しく把握する力。

○表現力

- ・ 対象者を踏まえ、表現や構成に配慮して伝えるべきことを明確に説明する力。
- ・ 文章の内容と図表等を関連づけて、その関係を正しく表現する力。

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

機械を扱う人の多くは、「機械は安全にできているはず」「自分が使っているときは大丈夫なはず」と無意識に思っ

た使用者の無意識と現物の機械の状態との間にズレが生じたときに起こるものである。読者のみなさんも毎日の生活のなかで、いろいろな機械を使っ

ているだろう。ひとつ覚えておくるとよいのは、現代の技術の多くは、そうしたズレを「制御安全」によって解決しようとしている、ということである。

いま世の中にある機械類は、センサなどの検出機器を取り付けることでトラブルに対応するものが増えている。そのような機械はスマートで安全そ

うに見える。しかし、「本質安全」が放置されたままであるため、何らかの外乱や想定外の力が加わると、たちまち大事故を起こす可能性を秘めている

のである。一方、「本質安全」に配慮して設計された機械は、何らかの不具合が発生したり、外乱が加わったりした場合でも、最後の最後で安全が保た

れるようになってい

る。本質安全に配慮した機械とは、端的に言えば、電気的な制御に頼らず、メカニカルな仕組みによって最終的な安全を担保して

いる機械である。

ところが、技術者はしばしば、本質安全を制御安全と取り違える。事故はそこで起こるのである。たとえば、機械の設計者は、制御系がエラーを起

こすとは考えていない場合がある。電子制御のプログラムのエラーはトラブルとして発現しない限り見過ごされる。これがシステムエラーの特徴であ

る。制御安全はたしかに合理的であり、利便性が高い。しかし、制御安全がただちに本質安全を保障するわけではない。制御安全それ自体がいけない

わけではなく、本質安全を確実に追求実行したうえで、制御安全を施す必要があるのである。

本質安全において最も重視すべきことは、「人を傷つけない」「人を死なせない」ということである。技術とはそもそも人間の生命や生活に資するた

めのものであって、それを危険にさらしたり、危害を加えるものであったりしては本末転倒である。

技術者は目の前の技術的問題の解決に追われて、視野がどんどん狭くなっていく傾向がある。細部へのこだわりや作り込みが技術者の仕事だ、と思

い込んでいる技術者も少なくない。とくに自分の専門分野での経験や知識だけに着目していると、他分野では当然視されている知識や知見を見過ごし、

重大事故を引き起こしてしまう場合がある。

たとえば、2004年に起きた六本木ヒルズの回転ドア事故がその一例である。この事故では、「回転ドアは軽くしなければ危ない」というヨーロッパでは当たり前の知識が、技術を日本に導入する過程ですっかり忘れ去られていた。その結果、元の原型の3倍にもなる非常に重い回転ドアが作られ、男児が頭をはさまれて死亡するという重大事故を引き起こしたのである。この回転ドアを設計した技術者たちが、「回転ドアは軽くしなければ危ない」

という知識や知見に着目していれば、少なくともあのように重くて危険な回転ドアは作らなかつただろう。

筆者は2004年に「ドアプロジェクト」という事故原因を調査・究明するプロジェクトを勝手連で立ち上げた。実物を使った実験などを通して、事故を起こした回転ドアは非常に大きな挟み力を生み出すドアであることが明らかになったが、そもそもなぜ、このように大きな挟み力が出る危険なドアが作られたのが、筆者には疑問であった。そこで、プロジェクトのメンバーとともに、大型自動回転ドアの技術の系譜と来歴を調査することにしたのである。

ビルの入り口に設置する回転ドアはヨーロッパで発明されたものである。3枚または4枚のドア羽根が中心軸に装着され、それを手で押して回転させて使うのが元々の原型である。やがて電気の普及にともない、モータによる中心駆動で自動回転させるものになっていき、それが回転ドアの標準型となった。ここで注意すべきことは、ヨーロッパの回転ドアは、フレームも骨材もすべてアルミで軽く出来ていることである。運用を重ねていくなかで、「回転ドアは軽くてゆっくり動かさなければ危ない」という技術的な知見を獲得していったためと思われる。ところが、日本はそのヨーロッパから技術を導入したにもかかわらず、結果として、ゴツくて重い回転ドアをこしらえてしまったのである。どうしてであろうか。

事故を起こした六本木ヒルズの自動回転ドアは、約10年にわたってさまざまな変更を経て出来上がったものであった。元々の原型はオランダ製の自動回転ドアで、駆動部のフレームも回転部の骨材もすべてアルミ製で、総重量は約1トンであった。ところが、この原型を日本に導入するに当たり、製造元の日本とオランダの合弁会社は、^(注4)回転部の骨材の表装材としてステンレスを使うことにした。日本の大型ビルの内外装では、メンテナンスの容易性と美観的な要求から、ステンレスを使うのが常識であったためである。

わずかな変更のように見えるが、この変更が事故の呼び水になる。骨材にステンレスを貼り付けたことで回転部の重量が増し、回転体を中心駆動だけで動かすことが困難になった。また、ビルの入口付近で発生する強い風に耐えられず、回転部の部材が破損した。さらには、建具が揺れたり、軋み音がでたりするなど、さまざまな不調や不具合も発生するようになった。

技術者としては当然、これらに対処しなくてはいけない。ただし、ここでまず注意すべきことがある。技術者たちが何を「問題」として認識していたかである。技術者たちが「問題」として認識していたのは、中心駆動の困難さと風圧への強度不足であって、ステンレス化粧によってドアの重量が増したことではなかつたのである。

何を「問題」と認識するかによって解決方法も違ってくる。合弁会社の技術者は、中心駆動の「問題」に対しては、回転体の外周にモータとブレーキを取り付けて外周駆動にすることで解決を図った。風圧への強度不足に対しては、ステンレス化粧によって補強済みと考えたのか、対処した形跡はない。重量が増したことで回転体の慣性力も大きくなったが、その危険に対しては、挟まれ防止センサを取り付けて対処することにした。つまり、制

御安全を図ったわけである。

ところが、ここで別の大きな状況の変化が起こった。製造元の合弁会社が経営破綻した^{はたん}のである。回転ドアを担当していた技術者たちは離散し、設計に関する図面や書類はオランダの会社が本国へ持って帰ってしまった。これは、設計思想や技術的な知識・知見が、ここで断絶したことを意味する。後を引き継いでドアの設置を請け負った日本の会社は、残された実機をもとに設計し直すより仕方なかった。そして製品化されたのが、回転部の骨材と駆動部のフレームとともにスチールに変更し、外周モータと外周ブレーキを増強した回転ドアである。スチール製の骨材とフレームにはステンレス化粧も施され、総重量2・7トン、元々の原型の約3倍にもなるゴツくて重いドアに変わったのである。

このような変遷をたどることになった主な理由として、地域による要求の違いが挙げられる。そもそもヨーロッパで回転ドアが考案されたのは、冬の冷たい外気を遮断し、建物の中の暖房効率を損なわないためである。しかし、比較的温暖な日本では、こうしたヨーロッパでの要求はさほど重要ではない。むしろビルの煙突効果、すなわち高層化に伴う強い風の圧力に対抗する必要が重視された。この要求を満たすため、ドア全体の強度が優先されたのである。

ドアの強度を上げることは、技術的な問題解決策としては、たしかに正解だったのかもしれない。実際、出来上がった回転ドアは、機能的な要求にも美観的な要求にも十分応える重厚なものであった。しかし、結果として、人を死なせるドアになってしまったことは事実である。

このことから筆者が考えるのは、問題設定の仕方に、そもそも問題があったのではないか、ということである。重さ3トンにもなるドア自体の危険性を問題とせずに、風圧や美観などを問題として対処したことに、そもそもその誤りがあったと思われるのである。

技術者に限らず、人間は問題解決については一生懸命よく考える。しかし、ひとたび問題が設定され、その解決について考え始めると、その問題が本当に解決すべき問題だったのかどうかは考えなくなるのである。これは、もし仮に、その問題設定に誤りがあった場合、その解決策も誤りになる恐れがある、ということである。問題をいかに解決するかも重要なことだが、それ以上に、問題をいかに設定するかも重要なことなのである。

六本木ヒルズの事故に関してはその後、回転ドアの別の製作会社が、対策品を試作した。この試作品では、ドアの回転羽根の先端部分が折れ曲がるようになっていた。この折れ曲がり子羽根の部分は^(注5)スナップ機構になっており、過度の力が掛かると折れ曲がる。A 回転ドアの試みの一例である。この考え方は、技術的な解答として正しい方向であると筆者は思う。

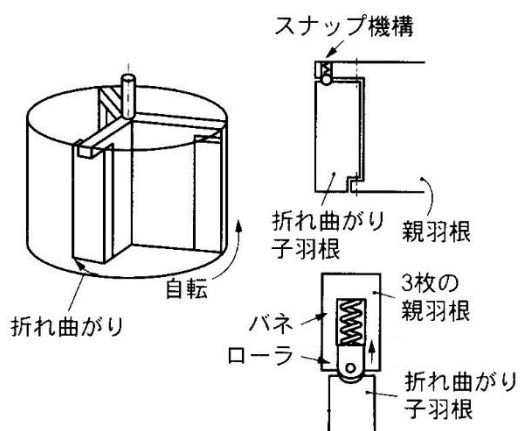
ところが、この試作品を売りに出そうとしたところ、どこにも買い手が見つからずにお蔵入りになってしまった。「回転ドアは危ない」と言って日本全国のビルというビルから回転ドアが撤去、あるいは使用不可になってしまったためである。日本では世間から「危ない」と認識されたら最後、たちまち目の敵^{かたき}にされ、全存在を否定されてしまうのである。「危険にはフタをする」というその考え方が、別のさらに大きな危険を呼び込むことを、日

本人はそろそろ学ばなくてはいけない。

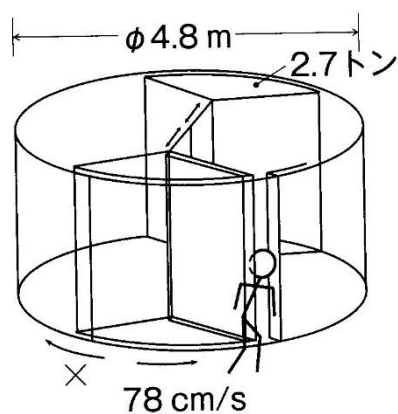
(畑村洋太郎『技術の街道をゆく』による)

- (注1) 外乱 \parallel 機械の動作を乱す外からの作用。
- (注2) メカニカル \parallel 機械的。
- (注3) 勝手連 \parallel 依頼されたり強制されたりしたのではなく、勝手に活動を始めること。
- (注4) 合弁会社 \parallel 複数の会社の共同出資によって設立された会社。
- (注5) スナップ機構 \parallel ばねの力で凹凸^{おぼとけ}を押し合わせ、一定の力がかけると外れる仕組みの留め金。

問 本文中に、回転ドアの別の製作会社が、対策品を試作した。とあるが、左上の図は、試作品の構造を表している。この図を参考にして、試作品の説
明である空欄Aを埋めるのに最も適当なものを、次のアからエまでの中から一つ選べ。



試作品の構造を表した図



【参考】2004年に起きた六本木
ヒルズの回転ドア事故

- ア 衝突の衝撃力を減らし、なおかつ挟み込みを防ぐ
- イ 衝突の危険性を事前に知らせて、事故を回避する
- ウ 強風による風圧を逃がして、軽くて滑らかに動く
- エ 挟み込みを未然に防いで、人間に衝撃を与えない

正解

問
ア

思考力・判断力・表現力との関係性

本文の主旨および論旨の展開を理解したうえで、図と関連付けながら筆者の主張を的確に理解できているかを問う問題である。

(思考力) 「文章に記述された内容から筆者や話者の主張、視点、相互関係などを思考する力。」に相当。

(判断力) 「文章における表現や論旨の展開などから、筆者が伝えようとする主旨を正しく判断する力。」および「引用された図表等と文章を関連づけて、そこにある関係性を正しく把握する力。」に相当。

サンプル問題：令和二年度入学選抜学力検査問題に「思考力・判断力・表現力」に関する問題として改訂

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

父の車で家に帰る途中、後部座席の「わたし」と助手席の姉はけんかをはじめた。二人は泣きわめき、最初は黙っていた父も、ついに「けんかするなら二人とも降りなさい。」と言った。姉は泣きやもうとしたが、一人だけけんかをやめようとする姉にもっと腹が立った「わたし」はかんしゃくを起こし、黄信号の急ブレーキで前につんのめった拍子に、自分でも驚くほど大きな金切り声を上げてしまった。

スーパールのなかは明るかった。

夕食の材料や一週間分のお菓子でいっぱいになったピンク色のカートが、ちょうどわたしの目の高さで通路を行き交っていた。

車から飛び出したときにはなにも考えられなかったけれど、家族連れでにぎわう店内を一人で歩いているうちに、なにかとても勇氣ある、ほかの子どもにはなかなか真似のできない、立派なことをしたような気持ちになってきた。でもたいしたことじゃない。これは家出なんかじゃない。わたしはひとりで、歩いて家に帰ることを決めただけ。そういいきかせて、胸を張って歩いた。

お菓子売り場で、家の近くのスーパーには売っていないチョコレートのお菓子をみつけた。パッケージの写真には、チョコと一緒にきらきら光る赤や黄色のペンダントが写っていて、必ずどれか一つがなかに入っているらしい。ビニールのがま口が入ったポシエットは後部座席に置いてきた。お金があれば買ったのと思うと悔しかったけれど、わたしはまだ、ひとりで買い物をしたことがなかった。月に一度、町の本屋に漫画雑誌を買いに行くときは、必ず姉か友だちが一緒だった。

お菓子の箱を戻して、しばらく店内を歩きまわった。通路を走って転んだり、カートにしがみついている小さな子どもたちがたくさんいた。まだ赤ちゃんなんだ、と思った。わたしはひとりでずんずんと売り場の通路を進んでいった。ふしぎとすこしもこころぼそくなかった。端から端まで歩いたらここを出て家に帰ろう、お父さんたちには絶対にみつからないように、ひとりで歩いて家に帰ろう、道はわかっているんだから。からだじゅうに力がみなぎっていた。なにも買えなくなつて、このスーパーに売っているものすべては自分のものだという気さえた。

そのときふと、店内に流れていた音楽が止まった。「迷子のお知らせをいたします。M町からお越しの……」これから帰ろうとしている、ねぎ畑だらけの町の名前だった。続けて呼ばれた名前もわたしの名前だった。年齢もおなじ。「白っぽい上着に、濃い色のズボン……」それだけがちがう。その日わたしに着ていたのは、淡いピンク色のセーターに紺色のスカートだった。

^aお父さんもお姉ちゃんも、わたしのことをちつともみていないんだ！ その日父が何を着ていたか、姉がなに色の靴をはいていたか、わたしはちや

んとみていたし、はっきり覚えていた。姉はえんじ色のワンピース、父は黒いセーターにおろしたばかりのまだ生地ほおの固いジーンズだ。「右の頬ほおに、ハート型のほくろがあります……」思わず頬に手をやった。わたしのほくろはハート形なんかじゃなくて、ただの三角形だった。お父さんもお姉ちゃんも、ほんとうになんにもみていない！

すこし離れたところから、細長い卵のバックを手に持った女のひとが、じっとこちらをみていた。そばで小さな男の子が、「お母さん、お母さん。」と花柄のスカートの裾すそをひっぱっていた。

だれにもみつからないように、わたしは走って店を出た。広い駐車場のどこかには、わたしを探す父の車が停とまっているはずだった。でもその車のまえてふたりを待ちぶせて、しおらしく許しを乞う気はしなかった。バイパス道路とぶつかる大きな交差点の信号は青だった。駆けだすと同時に、横断歩道の青信号が点滅しはじめる。まえかがみになって全速力で走った。渡りきる直前に、信号は赤に変わった。

二車線の道路の、左側の歩道を歩いた。道の左側にはパチンコ店とお好み焼き屋が並んでいて、右側にはガラス張りのマクドナルドがある。もうすこし歩けば、広い市民運動場がみえてくる。まだあたりは明るかった。このまま歩きつづけて、そのうち日が暮れて、夜になってしまってもかまわないと思つた。

横の車道ではひっきりなしに、車がわたしを追いこしていった。そのうちの一台が速度をゆるめて助手席の窓を開け、なかにいる父が姉と声を合あわせてわたしの名前を呼ぶところを想像した。そうなれば、しばらく振りかえらずにいるつもりだった。そしてたつぷり時間を置いたあと、「ひとりで帰れるから、放つておいて。」と叫んでもいいし、なにもいわずにずっと無視していてもいい。

また一台、車が脇を通りこしていった。はっとして立ちどまった。父の車だった。

遠ざかっていくその車は、みあやまりようもない、わたしがいつまでもすきになれないあの深緑色の、わたしの誕生日に近い数字がナンバープレートに並ぶ、父の車だった。一瞬だったけれども、後部座席の左側にだれかが座っているのがみえた。顔はこちらを向いていた。スピードをゆるめることなく、車は道の先のカーブに消えていった。

奇妙な感覚に囚とらわれたまま、わたしはしばらくそこに立ちつくしていた。周りの景色はぼやけ、お腹なかの底が冷たくなった。

お父さんもお姉ちゃんも、どうしてわたしに気づかなかつたんだろう？ 歩いているわたしが、家や車のなかにいるわたしとぜんぜんちがうふうに見えたから？ そしてあの子、助手席のうしろに座っていたあの子は……？ ぼんやりしている頭のなかに、徐々にその誰かの輪郭が引かれていった。

それは白い上着に濃い色のズボンを穿はき、頬ほにハート形のほくろのあるだれかだった。そのだれかがスーパールでみつけれられ、父と姉と一緒にあの車に

乗り、わたしのふりをして家に帰るのだ。そして待っていた母に「おかえり」といわれ、食卓のわたしの席に座り、わたしのベッドで眠るのだ。

いつのまにか、すっかり日は暮れていた。対向車のヘッドライトがまぶしい。スーパリーのなかではからだじゆうに満ちあふれていた力が、もうどこにもなかった。気づけば目から、涙がぼろぼろあふれていた。

じっとしているうちに、セーター一枚では寒さがこらえがたくなってきた。首をすぼめ、セーターの袖に手をひっこめて、わたしはとぼとぼ歩きはじめた。あれだけ確信していた道のりも、もう定かではなくなっている。もつとまえに右か左に曲がるべきだったかもしれないし、目のまえに見えているカーブの先にはどう道が続いているのか、いつものようにはつきりとは思いつけない。

空の高いところでは星が輝きだしていた。わたしは再び立ちどまり、夏休みにプラネタリウムで覚えた北極星を探そうとした。夜じゆうずっとおなじ場所でも光っていて、大むかしの砂漠の旅人たちに帰り道を教えたという星……家の庭から何度も姉とみたことのある星なのに、いまはどんなに目をこらしてもみつけれない。

もしもう一度――歩き出したとき、わたしはここに誓った。もしもう一度あの車に乗って、家族みんなでおばあちゃんちに行ったり、バッテリーグセンターでボールを打ったり、デパートに行って食品フロアを歩いたりすることができのなら、もう二度と車のなかで泣きわめいたりはない。二度とお姉ちゃんをぶったりしないし、黙っているお父さんをずるだとも思わない。

道はようやくやく、ゆるいカーブに差しかかりはじめていた。カーブの先には左に折れる道があり、角にはその年でできたばかりのコンビニエンスストアが青白く光っていた。そしてその駐車場の一番端に、みなれた深緑色の車が停まっていた。

「なにしてるの？」

「ちやうど明るい店内から出てきた姉が、わたしの顔を見ておどろいた。」

「お父さん、来て。」

「姉は半開きになった店のドアの向こうに叫んだ。出てきた父も、わたしをみておなじように目を丸くする。」

「歩いてきたの？」

「わたしはうなずいた。姉はえーっと大声を出して、持っていた白いビニール袋を振りまわした。」

「今日はお母さんと留守番してるはずだったんじゃないの？　ここまで家からひとり歩いてきたの？　なんで？」

「家からじゃないよ、さっきのあの……」

「いいかけて、わたしは姉の格好に気づいた。姉はワンピースを着ていたけれど、その色は覚えていたえんじ色ではなく、青に近いむらさき色だった。」

うしろに立つ父は、灰色のセーターによれよれのジーンズを穿いていた。ふたりとも、わたしが覚えていた格好とはすこしだけちがっていた。

「お母さんには、ちゃんといってきたのか？」

父が近づいてきて、からだをかかめる。その朝きれいに剃ったばかりのひげが、鼻のしたにうっすら生えている。

「ここまで歩いてきたのは立派だけど、こんな時間にひとりで出歩いちゃだめだぞ。お父さんたちとここで会えなかったらどうするつもりだったんだ？」

父はわたしの背中を押して、車に向かわせた。12の18。ナンバープレートに並ぶ数字は、わたしの誕生日の日付そのままだった。でも、最後の桁は7だったはずだ。父がはじめてこの車に乗って家に帰ってきた日、わたしは何度も、「どうしてあと一つちがう番号をもらえなかったの？」と、しつこく文句をいったはずだ。

「お父さん、いつ車の番号変えたの？」

父はわらって、「変えてないよ。」とこたえた。

姉は助手席のドアを開けず、向こうがわに回って後部座席に乗り込んだ。そこにはだれも座っていないかった。置き去りにしてきたはずのポシェットも見当たらなかった。父は車を発進させた。街灯のしたを過ぎていく風景は、ふだんとなにも変わらなかった。住宅街と畑と学校が、覚えている通りの順番に現れる。それはわたしがよく知っている道、完璧に記憶に刷りこんであるいつもの道だった。

カーステレオからは、低いヴォリュームで父のお気にいりのフォークソングが流れていた。姉とわたしはでたらめな歌詞をつけて、大声で一緒に歌った。途中、北極星がみつからないというとき、姉はすぐ窓におでこをくっつけて、その小さな白い星を指差してくれた。家に着くまで、わたしは窓越しにずっとその星をみつめつづけた。かぼそい光を強く目に焼きつけた。これから先、またひとりぼっちになることがあっても、二度とその光を見失わないように……。

それから三十年の時間が経って、先月、長らく患っていた年上のいとこが亡くなった。葬儀の日、喪服すがたでそれぞれの住まいから駅に到着した姉とわたしを、父がロータリーで拾った。父はいま、白いプリウスに乗っている。去年買い替えたばかりだというけれど、シートにはすでに煙草の匂いが染みついていて、助手席には母が座り、母のうしろにはわたしが座り、わたしの隣に姉が座る。むかしから変わらない、おなじ位置だった。

葬儀の帰りに思うところあって、わたしは助手席のうしろからあの忘れがたい、不可思議な午後の記憶を三人に話して聞かせた。だれも信じてくれなかった。「夢だろう。」と父はいい、「こわい話ね。」と母はいった。姉は後部座席で半分目をつむりながら、げらげらわらっていた。

わたしの頬のほくろは時を経るにつれすこしずつかたちを変えて、いまではすっかりハート形になっている。あおやまなえ（青山七恵『ブルーハワイ』による）

問1 本文中に、二車線の道路の、左側の歩道を歩いた。とあるが、その理由について話し合った次の会話文の **A** () **D** に当てはまる本文の記述を、後の **a** ~ **d** の中から選んでそれぞれ記号で答えよ。なお、**a** ~ **d** については本文中に破線で示してある。

生徒1 どうして「私」は左側を歩いたのかな。

生徒2 左側の方が明るくて、歩きやすかったんじゃないか？

生徒3 でも **A** とあるけれど、どちらの方が明るいとは書いてないよ。

生徒2 じゃあ、反抗的になって、交通ルールに逆らってみたとか？ 歩行者は右側通行だよ。

生徒1 確かに、ここより前に **B** とあるから、少し反抗的な気分にはなっていないそうだね。

生徒3 でもそれは、父と姉に対してじゃないの？ 初めは車内のケンカだったけど、その後「私」は二人にもっと怒っていたでしょう？

生徒1 ああ、迷子の呼び出しのあたりか。 **C** とある。自分の特徴を間違えられたと思ったんだよね。

生徒3 怒っていたんだから、二人を意識してはいたんだよね、きつと。父と姉が家に帰るとき、必ず車に乗るのはわかっていたし。

生徒2 そうか、車は左側通行だ。それが「私」にはわかっているから **D** ということになるんだね。

a お父さんもお姉ちゃんも、わたしのことをちつともみていないんだ！

b でもその車のまえでふたりを待ちぶせて、しおらしく許しを乞う気はしなかった。

c 道の左側にはパチンコ店とお好み焼き屋が並んでいて、右側にはガラス張りのマクドナルドがある。

d そのうちの一台が速度をゆるめて助手席の窓を開け、なかにいる父が姉と声を合わせてわたしの名前を呼ぶところを想像した。

問2 二車線の道路の、左側の歩道を歩いた。の理由について問1の対話が導いた結論として適当なものを、次の **A** から **E** までの中から一つ選べ。

A 車にはねられないように、明るい店が並び運転手からよく見える左側を歩きたいと思ったから。

I 父と姉が車から自分を見つけ、声をかけてくれることを待ち受けるような気持ちがあったから。

ウ 父が自分に気づいてくれるか心配で、自分が先に父の車を見つけて合図をしようと考えたから。

E ちつとも自分を見てくれていない父と姉に絶対気づかれないよう、車に背を向けたかったから。

正解

c	A	問1
b	B	
a	C	
d	D	
イ		問2

思考力・判断力・表現力との関係性

小説のさまざまな記述から、主人公の心情を理解したうえで、その考えを根拠を示しながら説明することができるかを確かめる問題である。

(判断力) 「文章に記述された内容から必要な情報を収集して、登場人物の関係や心情変化、様々な主張の関係、全体の要点などを把握する力。」に相当。

(表現力) 「対象者を踏まえ、表現や構成に配慮して伝えるべきことを明確に説明する力。」に相当。